

## 犯罪被害者等施策講演会（第11回）

日時：平成30年3月27日（火）14時～15時30分

会場：警察庁総合庁舎7階 大会議室

演題 「悲しみを生きる力に」

講師 入江 杏 氏

今日はよろしくお願いいたします。初めに自己紹介と、あと事件のバックグラウンドをご理解いただくために、10分ほどのVTRをご覧いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

（VTR概要）

- ・ 世田谷事件の概要
- ・ 事件後14年経過した入江さんの現状
- ・ 入江さんが取り組んでいるグリーフケアの活動の様子

ありがとうございました。今、VTRをご覧いただきましたけれども、改めて、今日はよろしくお願いいたします。私の今の立ち位置といたしましては、上智大学のグリーフケア研究所というところで非常勤講師をさせていただいています。

また、私は、世田谷区で共助の場の応援にも努めております。空き家事業とグリーフサポート事業が結び付いて、新しく協働事業として立ち上がったグリーフサポート事業の応援です。新たにできた悲しみの支えの場を世田谷区のグリーフサポート検討委員という立場で応援する仕事をしております。

本日、お手元に配布させていただきました「ミシュカの森」のパンフレットですが、「ミシュカの森」と申しますのは、悲しみを核として、人と人とを繋ぐ中間支援のネットワークです。後ろに私のプロフィールも書かせていただいています。今までいろんな方々を講師にお招きいたしまして講演会をさせていただいています。直近では、細谷亮太先生という聖路加の小児科の先生をお招きして、また、作家の平野啓一郎さんや、批評家の若松英輔さんといった若い方については、少しでも、死生学、グリーフケアに若い方の関心を呼び起こそうということで、お招きしました。

今日、お招きいただいた内容は、犯罪被害者等の施策が内閣府から警察庁に移ったことに伴って、犯罪被害者ご遺族の現状、事件直後の困りごと、中長期的な負担や、それから犯罪被害者の支援に関わる関係省庁・地方公共団体の方々に対して望むことなどといったお話でした。今まで警察にお招きいただいた講演会では、「もう、大変感動しました」というご感想を頂く度に、私としては、大変複雑な気持ちになりました。

犯罪被害者の遺族、しかも未解決事件ですから、何よりも未解決ということが辛いわけです。感動してくださったのはありがたいのですが、感動していただいても仕方がない、と強く思ったわけです。一般の方がいらっしゃったり、悲しみを抱えておられるご遺族がいらっしゃる講演会では、そういう方々に少しでも生きる力を、励ましのメッセージを、希望のメッセージを伝えるために、ある意味では感動的な、ある意味では、ロマン化したお話を伝えていたわけです。

私の話のことを感動的なお話だと言ってくくださるのは大変ありがたいことだと思っています。悼む思い、つながるいのちということが、初めに申し上げた「ミシュカの森」の基調通音でもあるのですが、「悼」という字・・・これは、りっしん偏に卓球の卓と書きます。感情が揺さぶられ、テーブルがこう揺さぶられて涙するというときに、激しく心が動く様子が「悼」という漢字になった、と教えてくださったのは、「ミシュカの森」の最初のゲストでもある柳田邦男さんでした。悼む思いがあつてこそ、命がつながれるということで、自らの悲しみを率直に語り、悲しみからの再生を伝えることで、講演等の機会を頂いているのはありがたいことと言えます。

けれども、今日は、事件直後の困りごと、中長期的な負担といったことを含めて、「悲しみを生きる力に」というテーマではなく、辛さ、苦しみに焦点をあてて、お話をさせていただきたいなと思います。

こういうお話をさせていただくときには、いつも4人の力添えがなくては話せないと思っています。ここで、私の大切な妹家族のご紹介をさせていただきますと、一番左手に映っております私の妹の宮澤泰子。亡くなったとき41歳でした。「やっちゃん」「やっちゃん」と呼ぶ、仲のいい姉妹だったんですけど、やっちゃんのお連れ合いの、旦那さんのみきおさんですね。そして、みきおさんとやっちゃんの間にも生まれた、にいなちゃん、礼ちゃん。この4人に手を合わせてというか、この4人のためにお話しするという気持ちで語っています。この4人と、「出会い直し」をする時間を頂いたと思っていつもお話しさせていただいています。

今日は、ご依頼に沿って、どれほど再生があつて希望があつたとしても、辛い部分、悲しみの部分、怒りの部分、そういった部分にも焦点を当ててお話しせざるを得ないのです。私にとっては辛い時間です。

今、ご覧いただきましたVTRは、二日に渡って、20分の特集番組を組んで頂き、通しで40分のを11分に短縮してご覧頂きました。

喪失からの再生を模索するためには、ケアの文脈においては、限りなく「私（わたくし）の物語」、プライベートの物語として紡ぎ直される必要がある、ということを最初に申し上げておかなければなりません。警察の、とか、メディアの、とか、社会の、とか、もうちょっと小さい単位ですと、例えば、その家族の、とか、様々な単位があると思いますが、そういったことでなく、喪失の回復の物語の最初の一步は、「私（わたくし）」の物語」を回復するということが大切だということをお伝えしています。

また、私の仕事といたしましては、研究者でもなく、それから心理の専門家という立場ではなく、当事者の枠組みでお話できるとしたら、技術を学んだり、それから勉学を重ねても、どうしても伝えきれない部分、対人援助の基本の「き」の字、言葉にできないことをお伝えしなくてはいけないというふうに考えています。

それはどういうことかという、どんな人も、その人独自の物語を生きており、その物語こそ、その人の核であり尊厳の源である。その人の物語を聞き取り、共感できる感性を身に付けることが、対人援助の基本の「き」であるということです。ですから、よく、傷つく、傷つくと言いますけれども、傷つくというのはどういうことかと。

他人の言動によって自分の核となる部分、その、私の語った物語、それはおかしいのではないかというように、ケアの文脈において、否定されてしまうということを傷つくというのではないかと思います。

見えない涙を見、発されない言葉を聴くこと。その人独自の物語。自分の物語を語り始めるためには、弱い立場の人が、どれほどのためらいを抱えるかも含めて伝えるのが、私の仕事だと思っています。

今日は、私の本の中から、最も直近の悲しみ、苦しみ、それから辛かったこと、そしてそれが長期にわたってということで、直後の話も書かせていただきました。これは、2013年の出版なんですけれども、まるまる悲しみ、苦しみを振り返ることにあてた章がありますので、それを振り返っていきいたいと思います。

拙著の22ページの中で紹介したのは、宮地尚子先生の「環状島モデル」です。トラウマを抱えた人とその人を取り囲む人間関係を「環状島」という地政学のモデルを使って説明したものです。

今日、皆さまに考えていただきたいのは、環状島モデルの中のどの立ち位置に皆さんがいらっしゃるか。内海、内斜面、外斜面、外海・・・立ち位置によって、物事の見え方は大きく違ってくるでしょう。「曖昧な喪失」の苦しさ。これは、『悲しみを生きる力に』の30ページに書いてあります。

「突然の喪失体験をいっそう苦しく辛いものにするのは、「なぜ？」という疑問です。「なぜ、私が？」「なぜ、私だけ？」「なぜ、こんなふうには？」と問うても答えは見つかりません。そして、問えば問うほどに、答えのないことが苦しく辛く感じられます。」

曖昧な喪失とは、典型的な悲嘆感情、悲嘆反応ができない状態。多義的な選択を常に迫られる苦しみです。はっきりしないままに持続し、解決することもできない、いつまで続くか見通せない。

次にお話するのは、悪意を探る作業です。いかに社会的な基盤を揺るがしたかということを書きました。「なぜ？」と答えのない問いを前に、私はどれほど苦しめられたことでしょうか。この問いへの手がかりとして、私たち遺族に課せられた作業は、捜査に協力するなかで悪意の痕跡を探る作業でした。毎日毎日、家にこもって捜査員を迎え、思いつく限りのことを話しました。まったく事件と関係ないと思われるような話でも、もしかしたら何か記憶

の手がかりになるかもしれないと思い、話をしました」。

私は当事者なので、今読んでいても苦しいです。特にこの部分ですね。一番の悪意。それは私たち遺族さえ、疑いの対象になってしまうということです。たとえば、マスコミで「犯人の血液型はA型」と報じられた翌日、弔問に来た近所の人が私に血液型を聞いてきました。私たち一家にA型は誰もいません。すると、「A型でなくてよかったわねえ」としみじみ言うのです。それを聞いて、私は、自分たちも疑いの対象になっていることに初めて気づきました。大切な家族を奪われて悲嘆にくれている遺族が、犯人として疑われる。それまでは、そんなことがあるはずはないと思っていたのです。密葬の時に、みきおさんのお父さんが「我々も容疑者なんです」と口にし、その言葉に母が弾かれたように怒りました。「疑われるわけはありません!」。そんなことを考えることさえ不謹慎だということです。みきおさんのお父さんも、事情聴取などを行う警察の対応に不信を感じていたから、思わず言葉にしてしまったのでしょう。「あんな事件に巻き込まれるなんて、何か因縁があるに違いない」「一家四人が殺されるなんて、あの家は呪われている」「泰子さんとは学生時代のお友だちでしたから、お葬式には参列しましたが、もう連絡はしないでください。うちの娘は有名私立校に通っていて、こういう事件にかかわるのは迷惑なんです」「事件が起きた家のそばを通るのも恐ろしいし、見るのも気味が悪い」。これが直後の悲しみです。

そして、それだけで終わりというわけではありませんでした。「長期に続く苦しみ」という、36ページから38ページの一部を読ませていただきます。

「トラウマというと、悲惨な出来事が起こったときに生じるものと想像されがちです。しかし実際には、その出来事が起きた後々にまで衝撃を長く引きずり、傷が広がり続けるものだとことを実感することがあります。私自身は、トラウマを特に意識しなければ、心が傷つくこともないと思い込もうとしていました。ましてや、体への影響など気にしていられないとも思っていました」。多分、今もそう思っていると思います。こうして皆さんとお話しするときには、大丈夫だと思わないと、お話しできません。

「ところが、事件から10年以上も経ってから突然、体に症状が現れました。それは、東日本大震災の直後のことです。テレビ画面に映し出された震災や津波の被災地の光景は、想像をはるかに絶するものでした。「壊滅」という言葉の意味をまざまざと思い知らされる映像を見ながら、突然に蘇ってきたのが、事件後に何度も何度も繰り返し見た悪夢でした」。

この話は、講演会の中で実際にお話しすることがあります。字面を追うということではなくて、私の体験の中で、被災地で出会った方々との出会いのお話なども込めてお話しすることがあります。特に、被災地に行ったお話も書いていますけれども、被災地の方々には、悲しみを共にするという、共感するという意味ではお話しさせていただくこともあります。

あともう一つですね。これはちょっと今までとは違うベクトルのお話かもしれませんけれども「弱者」はこうあるべき、という思い込みです。これは、パブリックスティグマのお話です。皆さまの、社会からの見方のお話ですね。

「事件当初、周りがすべて水没してしまい、まるで無人島に一人取り残されてしまったよう

に感じたということを先にお話ししました」。ちょっとこの本の中で書いたのですけれど。

「傷つきやすい状態」**vulnerable** という言葉もありますが、「自分の持っている力のすべてを根こそぎ奪われて「無力な状態」となり、その上、無防備で他からの攻撃を受けやすい状態を指します。無力であることよりも、一層不安定な状態です。無力な状態にある人を思い浮かべてください。どんな人を思い浮かべますか。まず、「かわいそうな人」というのが思い浮かぶでしょう。あるいは「惨め」「みすぼらしい」「目立たない」「けなげ」「か弱い」、そのほか「おぼつかない」「おとなしい」など、「無力」という概念には様々な形容の仕方があります。もし、無力な状態にある人が、そうした形容の枠内に収まるのなら、その人は他人や社会から攻撃を受けることはない、少ないかもしれません。なぜなら、普通の人々の想像する範囲なので、理解されやすいからです。しかし、無力な状態にある人が、そうした人々の想像する範囲から外れ、理解できない行動などをとると、その人は途端に攻撃を受けやすい状態に置かれることになります」。

これが **vulnerable** です。やはり、事件直後から、やっぱり生活を立て直さなければならぬと思いつつも、ずっと傷つきやすい状態に置かれるわけです。万が一にも、笑ったり、買い物をしていることでさえも「あの人、買い物している」「意外に元気そうじゃない」「仕事にまた復帰したんだ」と言われたり、「あの事件がまだ解決してないのに、意外に元気そうだね」と言われたりすると、事件捜査にもマイナスになるかもしれない。もしかしたら間違った情報が捜査に影響を与えるんじゃないかと思いついて、「孤立と疎外」という章には、「私は、事件後、一年はほとんど人とのつながり、ましてや社会的な交わりを断ったような状態でした。警察の捜査に全面的に協力するため、自分の時間はすべてそれに捧げたからです」。ですから、曖昧な喪失の状態に置かれた遺族というのは、**vulnerable** な状態、傷つきやすい状態であることを理解した上で、ある意味では社会的なつながりさえも自ら断って捜査協力をしようと一心に過ごしました。

ところが、「事件から 10 年近くたった 2009 年の末、私は、ある大学で学生たちに事件当時のことを話す機会をもちました」。これは、多分慶應大学だったと思うんですけども。慶應の湘南のキャンパスですね。

「大教室での講義にもかかわらず、みな熱心に聞いてくれて、講義の後、彼らの感想を書いたレポートも 100 通以上もらいました。感想の多くが「とても感動した」と好意的に受け止めてくれましたが、私には次のような感想が印象に残りました。

「殺人事件の被害者遺族というのは、もっとよれよれで、貧乏臭いかと思ったのに、意外としゃんとしていたので驚いた」「元気そうな入江さん、でもどこかで無理をしているのでは」といったものです。被害者やその遺族、あるいは障害者や貧困に苦しむ人など、社会的な「弱者」と思われている人々は無力な状態にあるはずだと一般の人は思いがちです。

したがって、「弱者」が明るくふるまっていたりすると、そうした自分たちの思いこみからはみ出ることとなり、理解ができなくなります。結果、攻撃を受けやすい状態に置かれることになってしまうのです。元気に明るくしているなんて、おかしい、生意気だと、社会か

ら攻撃の矢が飛んでくるのです」。

「マスコミなどで事件のことを大きく取り上げられれば取り上げられるほど、目立ってしまう。捜査協力のために、事件に関係しそうな事柄を一生懸命順序だてて、理路整然と説明すれば説明するほど、妙に冷静な人と捉えられてしまったりする。家族や周囲を力づけようと、明るく振る舞えばふるまうほど、やけに元気な人だと不審に思われたりする。結局、どんな行動も、すべてが攻撃の材料になってしまうのです。明るい雰囲気や心掛け、できるだけ前向きにふるまう、それが新しい人生をスタートさせるうえで大切だとわかっているけど、そう行動すると、逆に攻撃されやすい状態になってしまう。これでは、事件から何年経っても、かわいそうな人という枠内に押し込められ、ありのままの自分でいられなくなってしまいます。そして遺族としての役割を押しつけられ続けることになってしまいます」。「この状態から脱するために、私たちが選んだ手段は引越でした」。

私たちは、世田谷事件の遺族なんですけれども、世田谷事件の事件が起きてから、すぐに港区に引っ越しました。現在、港区在住で18年になります。でも、世田谷区の行政の区長が、私を行政の委員に招いてくださいます。そしてまた、行政の関わりを通して世田谷の仲間とまた縁ができる。そしてまた、港区でも新しい共助のつながりを作っていくということがかなうようになりました。自助と共助というところまで来たんですけれども、できたら、本当に公のお力添えが欲しいなと、今日、関係各庁の方々もいらっしゃるということで、中間支援、例えばグリーンサポート、NPOに支援するという、あるいは中間的なネットワークを作る人たちを支援するという、当事者に直接支援するというだけでなく、中間支援の組織に支援するというのも大切な役割だということをお留めいただけたらと思います。

「時間は止まったまま」ではない。マスコミなどで遺族の気持ちを表す常套句、ジャーゴンとしてよく使われる「時間は止まったまま」です。けれども、これは、仕方のない表現なのかもしれませんが、時間が止まったままの状態、遺族には心の変化や成長などが認められないわけではないわけです。今、ポスト・トラウマティック・グロースという見方がされていて、今、トラウマのお話をいたしましたけれども、ポスト・トラウマティック・グロースといえますのは、トラウマ後の成長、グロースなので、成長のことです。遺族は心の成長を得ると。

大きな悲しみを経た人は、心の成長を得るというお話をしていますけれども、それも諸刃の刃なんです。たとえば私は妹たちを失って、そして、いろんな方々の新しいご縁もできて、私が、本当に未熟な私が少しでも成熟し、心の成長を得たとしても、4人が帰ってきてくれること以上のことはないんだとお伝えしています。そうじゃないと、「ああ、その成長が欲しかったんですね」とまた言われてしまうわけです。その伝え方も大変難しい。特に若い方々ですね。

事件は、2000年でしたけど、その後に大きな悲しみを日本社会は経験しています。直近では、東日本大震災で、多くのご遺族が傍らにいるという、皆様が今まで考えられなかった

ような大量死を経験されたということで、そういった方々にもお伝えできるように、ポスト・トラウマティック・グロースというのは、ある意味、大変明るい希望がある概念ではあるんです。

けれども、それだけに留まらず、それをお伝えするときも、非常に遺族としては、大変複雑な思いと共にお伝えしないと誤解されるということがあるので、私のお話の筋立ての通底というか、底に流れるものとしては、希望をお伝えしているんです。けれども、希望だけですと、「何だ、そんな、4人が亡くなって、あなたは成長して、それが嬉しいんですか？」という言い方をされてしまうわけですね。かといって、トラウマに引っ張られて、時間が止まったままで、今まで何も私には、何一ついいことはありませんでした、というお伝えの仕方、トラウマ化だけに染められたお伝え方はしないようにしています。というのは、やはり特に若い人たち、希望を持った若い人たちには、社会への信頼を取り戻して前を向くということが命を伝えるという意味では大切だと考えているからです。

これはちょっと細かいことなんですけど、遺品の扱いということも書きました。何度も触れてきましたが、未解決事件の「曖昧な喪失」を抱えている以上、悲しみの意味など、簡単に見出せるものではありません。けれども、できるだけ前向きに生きていけるように働きかけをしています。そして、思い出の品との関わり方とか、遺品というのがどういうふうに扱われるべきなのかといったことを、様々な御遺族がいらっしゃいます。遺品をどうしてもそばに置きたいとおっしゃる方もいれば、もう遺品を見るのも辛いという方もいます。

私の母が心を閉ざすきっかけになってしまったのは、遺品がすべて、宮澤さん一家の事件なので、男系の御遺族のほうにいったん全部返されてしまったということで、私が無視されたという思いもあったのかもしれませんが。そういったように、遺品の取り扱いというのは、関係各省庁の方にはぜひ気をつけていただきたいなと思います。ある意味では、遺品に取り囲まれて生活しているということが、その人が望むならばということもあるかもしれませんが、それは本当に慎重に様子を見ていかなければいけないなというふうに私は感じています。

被害者遺族と仏壇の写真が撮りたいとマスコミから言われるということがありました。ただ、それもある意味では固定的なイメージではないかと思います。そうじゃなくて、さりげなく普通のインテリアの中で暮らしていくということが必要なんじゃないかなと思うこともあります。

これが被害者ストーリーから私の物語へと、少しずつこのお話も、初めの1章、2章は、やっぱり悲しみというか影の部分ですね。だんだん光の部分、再生へと、喪失から再生へとお話が転じていくわけです。「辛かったこと、悲しかったことを可視化する、それがもたらす意味は」。今、可視化すると、皆さんと一緒にお話しして、可視化する、目に見えるようにさせていただいたわけです。「それのもたらす意味は、自分の感情から目を背けず、それにきちんと向き合うことで、自分自身の物語に気づくことです。気持ちを整理し、表現できるようになると、誰かに伝えたり、相談しやすくなります。そしてその辛さに共感してもら

えるようになると、一層発見の機会が増えるでしょう」。

本当にいじめの渦中にいる子とか、それから今、虐待の体験をしている子は、自分の悲しみに向き合うことができない。それを可視化するということが、その可視化をどう支えていくかというのは大切な役割になると思います。ちょっとここは、私自身の気持ちで書いてみました。

「ここで注意したいのは、自分で書いた物語が「被害者ストーリー」に終始していないかということです。「被害者ストーリー」というのは、自分を常に「被害者」の立場に押し込める見方です。自分の行動、人生が自分以外の何かによってコントロールされていると常に考えるところに特徴があります。主人公はいつも被害者、或いは被害者意識の虜になっていて、「自分が不幸になっているのは誰か他の人のせいだ」と常に考えています。つまり自分の人生が外側から何らかの力によって常に統制を受けていると感じているのです」。

この被害者ストーリーから私の物語へ転じていくというのが大切なんでしょう。「私の場合は、まさに「被害者ストーリー」に終始する要素はたくさんありました。自分が何をしたわけでもない。なのに、突然の犯罪で家族を失った。犯人もいまだ見つからない。でも、私は「被害者ストーリー」に終始したくないと思いました。私が事件について、絵本の創作や読み語りなどを通して、社会に発信しようと思った動機は、失われた尊厳をもう一度取り戻さなくてはならないと強く思ったからでした」。

私の今の活動というか、母にあらがってまで、こうして自分の新しいペルソナというか、使命でお話しするというのに至った動機をここに書かせていただきました。ちょっと赤字のところを読みますね。「妹一家や私たちには、このような事件の被害者になるような落ち度は何もなかったと思っています。頭では理性的に考えていても、妹を助けられなかったことへの罪責感が重くのしかかります。愛していた家族を失った悲しみから生まれた感情です。すべての事実をできるだけ客観的に書き出す作業の中で、理性と感情はせめぎあいます。凶らずも巻き込まれた事件という外側からの統制によって、私は無力感にさいなまれ、罪責感の苦しみにいた。それが、私の「物語」の前半です。そこで、終わってはならないと思ったのは、私自身です。私が私の「物語」の書き手・語り手として、後半の私には、こうあってほしい、こうありたいと願ったのです」。

こうして後半の物語に続くわけです。この前半の部分で、遺族の罪責感（サバイバーズ・ギルト）ということは、講演会でも強く強調しています。それは、私がどうして妹たちを助けてあげられなかったのか。『スーホの物語』という物語の、先ほど、VTRで紹介しました、今日は、こういうお話をするつもりではなかったもので、普段の講演会のものは何も持ってきませんでした。けれども、にいなちゃんが最後に残してくれた絵などを実際にご覧いただいてお話を進めています。

「私の「物語」は、犯罪という外側からの統制だけに支配されているのではない。私は、かけがえのない家族の生きていた姿を記憶している。彼らと人生をともにした私は、大切な人たちのためにも、犯罪なんかには振り回されてはいけぬ。そう思った時、「物語」の後半



は、自分の心の声を聞いて、前向きなものに書き換えられなくてはならなくなりました。『スーホの物語』が、私の「物語」を「被害者ストーリー」から書き換える手助けをしてくれたのです」。

これが普段の講演会でお話ししている、警察の方とかいろんな方も、「感動的だね」とおっしゃってくださっているお話なんです。

「本来の心の声に耳を傾けずに発される「前向き」という言葉は、時に空虚に響くものです。言葉というものは、「何を言うかより、どんな気持ちで言うか」で伝わり方が違います。まずは、自分の心の声に耳を傾けてみましょう」。というふうに書いているんです。何を言うかということよりも、どんな気持ちで言うか、どんな話をするか、どんなふう語りかけられるか、ということで、後々受け止められ方が大きく違うということ、今日、持ち帰っていただけたらありがたいかなと思います。

例えば、私の夫は、2010年、事件から10年後、60歳という、ちょうど定年になったばかりなんですけれども、別に自分の会社だったので定年というわけではなくて、まだ本当に仕事盛りの夫だったんですけれども、大動脈解離で急逝しました。実は、倒れたときに、警察からの電話を受けている、謝罪の電話を受けているときでした。ただ、警察の方は、いらしたときに、「あの、こちらが悪いんじゃないですから」って第一声におっしゃった方がいらしたんですね。それは、大変、私の心に深く悲しみの傷を付けた言葉の一つです。

「夫の異変。夫が突然逝ってしまったのは、事件から10年目の年が明けたばかりの2010年1月12日の朝でした。電話をしている最中に、夫が首の付け根から背中にかけての痛みを突然訴えたのです。「痛い。今まで感じたことがない痛みだよ、これは普通じゃない」。私は、夫から受話器を受け取り、相手に「すみません、夫が苦しいと言っています。いったん電話を切りますから！」と慌しく告げました。電話の相手は警察です。夫に謝罪するためにかけてきたのです」。

夫は全く疑われるようなことなどない人で、お酒も飲まず、タバコも飲まず、真面目一筋の人でした。夫のおかげで、この事件からも立ち直ることができた。どれほど夫のおかげで助けられたかと感謝しています。

「今日の午後、おいででしたらお宅に伺ってお詫びしたい」。そんなやりとりの最中に、夫に痛みが襲って、「大丈夫？救急車呼びましょうか」と私が言うと、夫が「頼む」と。相手に慌ただしく事情を告げて電話を切って、そして救急車で運ばれて、夫は、そのまま帰らぬ人になってしまいました。

私は、今でも、あの夫の死ほどもう回復できない悲しみはありません。あの事件の悲しみのお話をしていますけれども、事件の悲しみ、夫の死を知って、事件の喪失体験は、純粹な意味での悲しみではなかった。ある意味では、怒りや理不尽さ、理不尽さに対する怒り、そして、どうして助けてあげられなかったかという自責の念ですね。その意味では、曖昧な喪失の中で普通の悲しみではなかった。ただ夫は、本当に急死で、ある意味では悔しさも残るんですけれども、それでも一生懸命生きて、そして私もそばに傍らにいたということで、夫

の死は、本当に不本意ではありますけれども、最後に看取ることができたということで純粋な悲しみだったと思います。夫は、本当に私の話をよく聞いてくれた夫でした。

「亡くなった夫は、いつも私の話を聞いてくれたのです。私を励ましてくれた夫のためにも、私もよい「聴き手」となって、誰かを励ますことができたと思います」。

ちょっと今日は時間がなくて母のことをどこまでお話しできるか分かりませんが、こういった支援の場にいらっしゃる方々にぜひ聞いていただきたいのは、まず「聴く」ということほど積極的な支援はないということです。相手の物語に共感して聴く。よい聴き手を得てこそ人は励まされ、悲しみから立ち上がっていきける。悲しみの水脈からよい聞き手を得てこそ勇気が湧いてくる。悲しみが力になると感じられるのは、そういうことです。そしてもう一つは続けることです。続けられるような仕組み作りをしていただきたいと何より思うわけです。

『母を看取って』という上智大学出版から出た本で母のことにも触れました。犯罪被害者の遺族となった母が、最終盤では失明して亡くなっていく場面を書かせていただいたんです。

母は、警察に厚い信頼を寄せていました。事件後も、協力のために、日夜もないぐらい話し続けて、捜査協力に身も心も捧げていました。ある種、一種の興奮状態だったのかもしれませんが。ずっと私が6歳のときから発症したリウマチに苦しめられていた母は、リウマチの痛みを忘れるほど、事件の解決を望んで、何か役に立てないか、と必死でした。警察官の方が、もういろんなことを聞く。母は何かの役に立てばという思いで何でも話していたんですが、母に聞いても、事件解決しないと思ったんでしょうか？毎日来ていた警察官の方の足が途絶えてきます。毎日来ていたのが1日おきになり、3日に一度になり、1週間に一度になり、そして月に1回、半年に1回で、やがて全く来なくなる。警察の足が遠のくと、母は失望を露わにして見捨てられたように感じてしまいました。事件に関わったことは誰にも言いたくないと言っていた母は、事件のことを警察の方だけには堰きを切ったように話していたのです。ひどい疲労にさいなまれてふさぎ込んでしまい、事件との関わりを人に知られることを極度に恐れて、引きこもるようになってしまいました。

母は、何より心配していたのは、「人の目」でした。事件との関わりで、私たち家族が世間からつまはじきにされるのではないかと。ということです。事件解決を願い、亡くなった人を悼み、その上に生き残ってしまった家族を案じる。過去と現在と、未来・・・すべてが辛いものとなってしまいます。今思い出しても胸が痛くなります。

もう一つお伝えしなくてはならない大切なことがあります。過熱報道による被害です。事件後、私たちへの郵便物は警察に管理されるという状態で、何も入ってこない状態がありました。捜査協力をする上で、余計な情報がなくてもいいと私たちは思っていたんですけれども、外に出るにしても、カメラの放列の中で、買い物に行くのにも、もちろん買い物なども全然行かれない状態ですし、子どもが学校に行くのにも大変な状態でした。当面の心配は、まず学校の新学期の始まりをどうしたらいいかっていうことも心配でした。この本にも、息

子の学校に説明しに行くということですね。それが、どれだけ心配したかといったことも書かれています。

ただ、報道被害は、直近で終わったわけではありませんでした。2年目、3年目にも報道被害は続き、これは、2015年です。テレビ朝日について、私はBPO（放送倫理・番組向上機構）に申請をいたしました。

テレビ朝日は、勧告という重大なお叱りを受けたわけですね。というのは、ある番組で、夫の高校の同級生が、今、テレビ朝日でコメンテーターをされています。その方を經由して、報道番組だということで、私は、出演を許可したんです。けれども、番組の中で、あたかもFBIの元プロファイラーの方と一緒に私が推理しているという作り立てになっていたわけです。「既に私には犯人の目星がついている」などと、全くなかった、私が全く言っていないことを、あたかも言ったかのように編集され、報道されてしまいました。テレビ朝日は、勧告というお叱りを受けました。

犯人の特定につながる具体的な発言は一切していないにもかかわらず、過剰な演出、恣意的な編集によって、私、申立人が、礼君、亡くなったやっちゃんたちの長男の発達障害に関連して、犯人の特定につながる具体的な発言を行ったかのように事実と異なる報道、公正を欠く放送を行ったテレビ朝日は、勧告という一番重い決定を受け、この申し立ては一定の成果を見ました。辛く悲しくメディアに寄せていた信頼が裏切られた思いですが、日々の自助努力というか、少しでも多くの方々に私の真意を伝え、信頼の回復、一定の積み上げてきたものを取り戻そうとしている努力を重ねているところです。

直近のことでこの場を借りてお話するのは、SNSによる被害です。直近3月の第1週のことです。「世田谷一家殺害事件の犯行グループは入江さん達です」。「世田谷一家殺人事件、被害者遺族の今…「助けが必要な人」から「助ける人へ」」。週刊誌に記事が出て、さらにこの記事がオンライン配信されて、多くの方々の目に留まりました。この記事に反応して、「世田谷一家殺人事件の犯行グループは入江さん達です」という書き込みがあったのです。もうこれは大変だということで、すぐに、お力添えくださったのが梓澤和幸弁護士という、BPOの申請時に御助力下さった弁護士さん方です。また、成城署の捜査一課の方でずっとご縁をいただいている警察官の方にもご連絡しました。そうしたら即日、即刻対応を取ってくださいます。この書き込みの主の方は特定され、警察の方がその方のところに行き、説諭し、書き込みは削除されました。

書き込みには自分の想定する被害者遺族像とは違う「助けられる人から助ける人へ」と、ちょっと私がつけたタイトルではないにしろ、このタイトルも含め、自分の想定する遺族像からはみ出た部分が気に入らなかったんだと思います。こうした誹謗中傷が拡散されてはならないと強く思いますが、SNSでの中傷は騒げば騒ぐほど、逆に目立ってしまう。かえって拡散されてしまう恐ろしさがあると実感した出来事でした。

事件化することで、注目され、全く根も葉もない言説が流布されてしまったり、注目されるということで加害行為をしている人を喜ばせてしまってもいけない。また、加害行為をし

ている人が、誰かを騙ったなりすましかもしれないと、いろんな心配ごとがありました、警察の方がすぐに対応してくださったおかげで、今回は事なきを得ました。

そして、その方は、自分が悪いことをしているという意識がなかったそうです。警察に協力しているつもりだったそうです。その方に、これは犯罪性があることだと深く認識させて、その方だけでなく、その方の周囲の方ですね、ご家族も含めて周囲の方にきちんと理解していただいて、このアカウントを削除するというのを、即刻していただきました。ほんの2週間前です。もう本当に、18年たっても、まだこの苦しみがつきまとうのかと思いました。

最後に、「いのちの授業」のことをお話しさせていただきたいと思います。岩波ジュニア新書と同じタイトル「悲しみを生きる力に～被害者遺族からあなたへ」というタイトルで、私は読み聞かせ、講演活動を続ける中で、全国各地の学校から「いのちの授業」をしてほしいと頼まれるようになりました。体験をもとに、私の考える「いのち」について子どもたちに話しています。

「いのちの授業」で私が話すのは亡くなった妹一家四人が、たとえ犯罪という理不尽な暴力で命を奪われたにしても、どれほど一生懸命生きていたかということです。当たり前の日常がどれほど尊いことか、いま、ここでこうして一緒にいられることが、実はいかに稀有なことか。ここで出会い、一緒にひとつのお話を聴いているというかけがえのなさを感じてもらえれば嬉しいのです。亡くなった人への思いを語ることは辛いことですし、聴いてくれる子どもたちにも悲しみが伝わると思います。聴いてくれる子どもたちを落ち込ませるような話をしているつもりはありません。みんな本当に一生懸命聴いてくれます。「いのちの授業」とか「人権の授業」というと、退屈かもしれないと思ったのに、「聴いて本当によかった」と言ってくれるので、私もほっとします。「生きているってかけがえのないことなんだと感じた」と言ってもらうと、本当に嬉しいです。話してよかったなと思います。入江杏という私のペンネームが「にいな (NIINA)」と「れい (REI)」という亡くなったふたりの子どもたちの名前の組み合わせから生まれた名であることを告げると、こどもたちは亡くなった二人に思いを馳せ、真剣に聴いてくれます。

また、ずっと続けている福島の学校での「いのちの授業」では福島の警察の方に大変心を配っていただいて、震災前から現在に至るまで、ご縁を頂いております。私の話を聞いてくださったこどもの作文が優秀賞を取ったときや、福島県から感謝状を頂いた時は、大変嬉しく思いました。

福島県警の被害者支援室の方の心配りが素晴らしいと思うのは、いつも県民サービス課という書き方で、連絡の封書などを頂くことです。当事者でないと、何でもないとと思われるかもしれませんが、例えば犯罪被害者遺族支援室とか、返信用の封筒でお出しするにしても、犯罪という言葉があるだけで、目を引き、郵便局で「どうしたんですか」と聞かれることもあるわけです。こういった「県民サービス課」というソフトなネーミングにしているというのも、ちょっとした心配りを感じました。また、いつも返信用の封筒とかも入れてくださって、仕事が続けやすいように考えてくださっているのを感じています。当事者が発信

を続けるというのは、とても心に負担がかかるものです。サステナビリティということに関しては、周囲の支援なくしては考えられません。福島 of 被害者支援に関しては、私の窓口になってくださっている方が警察のカウンセラーの方なので、日頃のさりげない配慮を感じます。その方の言葉として印象に残っているのは「警察官でよかったと思うのは、被災地で、レイプを始め性犯罪や、自死、いろんな悲しいことがあるけれども、警察官だから信頼してもらい、住民の中に入っていける。もし私が心理職というだけだったら、もしかしたら会ってくれないかもしれない。警察官でよかったと思った瞬間です」とおっしゃったんですね。カウンセラーでもあり、警察官でもあるということの両翼を活かしておられるなと思います。

今日は、普段の講演会とは違う筋立てでお話をしていますが、最後にもう一つ、犯罪の遺族ならではの辛さをお話しします。妹一家のお葬式が営まれ、700人近い方が御弔問に来て下さいました。ただお葬式は、警察の方に仕切っていただくざるを得ない状況でした。捜査協力のために、警察にすべてを委ね、万が一にでも犯人が葬儀に現れることを考えると、駐車場が整備され、交通整理がしやすいお寺を選んでほしいと言われたのです。当時は警察から言われたことは全て肯って、一刻も早い犯人検挙に協力するという気持ちが先に立ち、故人を心から悼む心のゆとりなど持つことも自分に許さない、という気持ちでした。警察のすすめで選んだお葬式の会場は名利でしたが、今までは檀家としての縁もなく、ご住職様も戸惑われたことと思います。法話に際して、礼くんに触れて、「たった6歳で逝ってしまうなんて、どれほど無念、無惨な人生でしょう」とおっしゃったのです。私に大変辛く響く言葉でした。

その後、この時の苦しい思いから救われた言葉があります。「人生はその長短に関わらず、全きものである」という言葉です。6歳で逝った礼君の一生も、60歳で逝った夫の一生も、そして夫の死後、102歳で逝った夫の父の一生も、一つの完全な円なんだと。長短で考える、長い短いで考えるのではなく、一人一人の一生というのは、一つの完全な円なんだと考えるようにしています。

今日はお話しできませんでしたが、いのちの授業を始め、各地の講演では、にいなちゃんが描いてくれた1枚の絵というお話をしています。レジュメに掲載していただいている拙文をご参照ください。「絵本の記憶」という、これは朝日新聞の絵本の連載をさせていただいたときに、最後の一冊に「与えられた道しるべ」と題して『スーホの白い馬』のお話に寄せて、にいなちゃんの1枚の絵が私を救ってくれたことをお伝えしています。小学生にもこのお話がとても心に響いたというふうに書いてくださいます。

最後に、行政、関係省庁の皆様へ望むことといたしましては、悲しみを吐露できる、吐き出せる、悲しみを伝えられる場があるということがどれほど助けになるかということを常々お話ししています。自分の心を開いて悲しみを吐き出していいんだよと、その一言で救われる人は多いと思います。海外の取り組みもご紹介していますが、自分の家族のことで恐縮ですが、夫がいつも私の話を聞いてくれたということも伝えて、耳を傾けることがどれほ

ど大切なのかということをお伝えしています。

「ミシュカの森」という、私の取り組みでは、グリーフケアの啓発と共に、グリーフサポートの普及活動にも力を入れています。お力添えとしては、こういった遺族支援の場、遺族だけではなく、悲しみを共助のキーワードとして、悲しみに目を向けるという支援の仕方もあるんじゃないかなと思ひまして、人、モノ、カネという、モノだけではなくて、人やコンセプトにぜひ予算を付けていただけたらありがたいなと思っています。

これは最後になってしまいますけれども、人間を人間として生かすのは、互いに人間として受け入れ、支え合う、ケア的な関わりとしての協同性の力ということで、こういう共助の場をお支えいただくということがありがたいということです。今に至るまで、上智大学のグリーフケア研究所や世田谷区などの行政、教育機関、出版によりご助力くださいました出版社の方々にも、感謝しています。

それぞれの立ち位置で、誰に何をどう伝えていくかというのを考えなくちゃいけないなと思います。私のような者の話も聞いてくださって、犯罪被害者・遺族に向けて、施策が作られていく、充実したものとなっていくのは心強いことです。責任とは **responsibility**、応答性ということなら、どのように、応えていけるのか、考えていかなければならないと感じています。

特に、関心のない層に広げていくということも大切な働きかけだと思います。冒頭でお話した「環状島モデル」の外海にいる方に、関心を持っていただくのは難しいことではあるのですが、無関心ではなく、少しでも関心を持っていただくことで、社会が変わっていく。受け入れられていくものも広がっていくと思いますので、外海への働きかけも含めて、いろんな柔軟な取り組みを、皆様のお知恵を拝借して、取り組んでいけたらいいかなと思っております。

最後の5分間は、音楽を聞きながら読み聞かせをしています。4人の魂にささげる、『ずっとつながっているよ』という絵本を読んで終わらせていただいています。

ずっとつながってるよ

こぐまのミシュカのおはなし

みきおさん、やすこさん、にいなちゃん、れいちゃん一家四人にささげる

ぼくはこぐま。名前はミシュカ。ぼくの大好きな家族を見て！

パパと ママ。それからなかよしのにいなちゃんとれいちゃん。

ぼくらはいつもいっしょ。

ふんわり花の咲いた春。

おやゆび姫をさがしたよ。

青い空がまぶしい夏。  
雲のイルカをみつけたよ。

木漏れ日 ちらちら ゆれる秋。  
灯火色に染められた  
落ち葉の手紙 ありがとう。

空気が ぱりぱり 冷たくて  
つららが きらきら 凍る冬。  
いっしょに 踏んだね 霜柱。  
楽しかった いつも。

だけど ある日  
信じられない できごと。  
にいなちゃん、れいちゃん、パパもママも、  
ぼくの 目の前から 突然いなくなった。

こんなことってあるのかな？  
あんなにやさしかったのに。  
あんなにだいすきだったのに。  
どこへ行っちゃったの？  
もう会えないの？

どんなに待っても  
帰ってこなかった……。  
どんなに待っても  
もう会えなかった……。  
どんなに願っても  
かなわない 願いがあることを  
ぼくは知った。

でもね ある朝  
やっぱり 空気が冷たくて  
霜が キラキラ 光る朝

ほら！ 耳をすましてごらん。

「ミシュカ、ミシュカ……」って  
ぼくを 呼ぶ声がある。  
にいなちゃんと れいちゃんが 呼んでいる！  
ぼくが 霜柱を踏むたびに  
「ミシュカ ミシュカ……」って  
ささやいている！

いつでも いっしょに いたんだね。  
風にも、水にも、光にも。  
いつでも いっしょに いるんだね。  
空にも、地にも、昼も、夜も。

どんなに遠く はなれていても  
ずっと つながってるから。  
ありがとう、わすれないよ。

今日は、長い時間聞いていただきまして、ありがとうございました。これでおしまいです。  
ありがとうございました。(拍手)

[了]